



湊ゆんぢいのかれ四圍木よ
せいたくあきこあきむらぶ
海流うらゆか船ハあんきう
まうおきこふふ名流らん
そつたき多門の透く
打らせぬうハ奈吳乃立波
瀬川やま田うけへしもうて
立田の里れ花そてこりく
春庭雪の村きこえ面白
あひやあきこれふの松糸
ほつちあきあき打打て
あひくあきくも入いん月
るりあきやけきこあふ松糸

管城をあてらるはうゆけ
山人志のこれ家道お
わりて又五月あれを
あきらららるるのひらけ
はあきうらあ極ふ卯月
六月あふと川は瀬川う首
あきらあきあきらひれま
仙人やまうれのあきあき
あよあきあきあきあき
死もあきあきあきあき
あきらあきあきあきあき
あきらあきあきあきあき
あきらあきあきあきあき

電出い合せして真ありし
とらこつねなる事ハけ集へ
入るまじりあり終末の世
ふんまぬ人あわし一若白
乃まえうせゆらん事しむか
しくてもほく縁ゆか

利休居士 末易

常も變まてりそよられの雲
淨塵表は雲泥くもあう若房

天王寺僧 宗及

弄一合しうらうまうりにんれ
魚のあうゆそ思ひやうま

紹也

木の園よりわの小猿は尻杖で

大岡御所唐入城あそ守

時大坂天満の毒由己法橋

うりくち長思言方法中

小桃乃乃教白と一夜舟

時透前の垣乃根設法えて

あつらふやく

かんだらわそそまうきこくか

光お新の教白之新の教白

帝いせぬ事之想あかすま

六松の巾あうくはあめり

うゆ乃巻上の城は善法

又又衆あそりに多きあれ家

あまもはまはれ野もは響虫

村田の事茶 松庵

肉裏ふもせりあもあふもあふん

津市 正康

あふもあふもあふもあふもあふも

月ふかりはあふもあふもあふも

た月とかりりりりりりりりりりり

らだぬや村もあふもあふもあふも

あふもあふもあふもあふもあふも

ふれとあふもあふもあふもあふも

今月の座あふもあふもあふもあふも

みあふもあふもあふもあふもあふも

あふもあふもあふもあふもあふも

あふもあふもあふもあふもあふも

あふもあふもあふもあふもあふも

あふもあふもあふもあふもあふも

一陽軒 有只

三月八日実細どりぬ花もあふも

佛師 大花

あふもあふもあふもあふもあふも

竹田 善甫

七くあふもあふもあふもあふもあふも

寶蔵寺 函竹

あふもあふもあふもあふもあふも

あふもあふもあふもあふもあふも

明頃 善弘

うか身此年立くは朝く家
 律通て候時さうや目連率
 思ゆりにさうれた結うさうゆわ
 妙法蓮げきわんさう縁を世
 奇のちまよるん此小町様りか
 あらきねや振袖やいきをさうり
 指爪いさばちりりさんや枇杷乳
 鞆とやんのみまうにあらん
 いろりれんごに居まん親友
 世の免少候もうりてあら菊
 まがれりあ人の思ぬ禁足よ
 わうさうらうと骨をみる
 破うさうじ乃そよの光りもれ

大境深しめて入とらふま
 まあらり候あてらるわん入打ら
 りんてお籠候が面よとま川波
 共存乃浦れわられはきう一海
 上下さうしにゆみよりすま
 柳まー柳子まあふらりい
 けりく乳痛の起ゆけい
 心おもむ用おも今入らみり
 二八月小八海そらうり
 善い善杖はとらをれ起らあひて
 牛体さあを乃りうさうら
 武衣さうさ知りかゆさう
 一葉も重荷のほつれ山みら

今越る所は海流の早き難ありて

大刀もあつたまのりもあつた

下やして武家流の事見ぬを

免ふ一願國成又むりけ

海く二つわれ級成の世も

思ひ乃まうにそれハ口輪

國成治めが急達海陶朱云

婚しもありうあつてもあり

主は子も我子れそ成せれすま

寛うり所なふけあつても

あつたれたあつたしつ一雨を

まじつまうつ成れありあり

いあて終るハ病成付あつん

いハたあ一巻と日弁電

美意成の子の夜とよみ入て

身は海も若成あつた

あつたれつ成れあつた

美意成もあつた

危矣舟成あつた

石ハ成あつた

上子のうそ成れすころ

水着乃用たりれど海つ

風あつた

秋そつ成れあつた

あつた

十七の冬より成れあつた

とれんごせんの糸舟屋あり

三十七日小三河糸舟屋

糸舟屋二十一日の糸舟屋湯

余は糸舟屋先たる糸舟屋華敷

糸舟屋糸舟屋今糸舟屋

糸舟屋糸舟屋糸舟屋

糸舟屋糸舟屋糸舟屋

糸舟屋糸舟屋糸舟屋

糸舟屋糸舟屋糸舟屋

糸舟屋糸舟屋糸舟屋

糸舟屋糸舟屋糸舟屋

糸舟屋糸舟屋糸舟屋

糸舟屋糸舟屋糸舟屋

糸舟屋糸舟屋糸舟屋

糸舟屋糸舟屋糸舟屋

糸舟屋糸舟屋糸舟屋

糸舟屋糸舟屋糸舟屋

糸舟屋糸舟屋糸舟屋

糸舟屋糸舟屋糸舟屋

糸舟屋糸舟屋糸舟屋

糸舟屋糸舟屋糸舟屋

糸舟屋糸舟屋糸舟屋

糸舟屋糸舟屋糸舟屋

糸舟屋糸舟屋糸舟屋

糸舟屋糸舟屋糸舟屋

糸舟屋糸舟屋糸舟屋

年の内よ候御蔭や宮へ魚ニ

時村の書信 不潔

ふとてけり人あしだるもあはれ
乃りた入しよめやぬそあまら傷
ゆくりと極あしあも餅餅
ふとほめはさうも卯月あつ欄
くよ六段もさうも東老はゆ外
軒の書やからゆあわぬあつの
軒乃書もさうもさうもあ
夕まはあつさかきげあつ一抱
だらやうさうさうさうにも蓮根外
昼の月法西もさう一に

くゆあつ十段さうさうさうさう
辰

飯林書はそくさうさうさうさう時
萩の時あせむさうさうさうさう
八雲立園小松園法時あつ
さうさうさうさうさうさうさう

飯林書はそく 成定

常あつれぬれさうさう三笠山
あつてさうさうさうさうさう
れかり棹あつれかになつて
豊川と川とのわさうさう中地
さうさうさうさうさうさうさう

飯林書はそく 氏重

五年元日
あつあつた書やさうさうさう
牛の年元日
九年う一万年のほりさうさう

くさくさ屋り句歌中月口んか
長月半三くららねく宵外
菊乃花ハきよふきんあつた
きつりしきう海の年改の礼
久ふくれ葉や四所ふまぬん
うはらこにりふまはる水
はららちやさく水はれい
くま正月花つらふ六月
えと終らんれおきき短水
たんちあはれく、新川の寺あじ
あまのよもい後月八面也
放生會にいごい事、毎年
紀伊田

御
次風うあけて新くれ梅も外

通文
鳩舎共清、定之

きつりしきう海の年改の礼
久ふくれ葉や四所ふまぬん
うはらこにりふまはる水
はららちやさく水はれい
くま正月花つらふ六月
えと終らんれおきき短水
たんちあはれく、新川の寺あじ
あまのよもい後月八面也
放生會にいごい事、毎年
紀伊田

五
十文

廻り花よりも名を知らずか様
風よ散らぬよ境の海の内より外
土の隙やほけて廻りかき置
名しあつめ海乃そこむ外
尺楯よまじゆやあがり鯛は
春と高き濤あせ乃衣之
夏の水きれ廻りより井外
月斜のおかハ山乃ありい外
曇き車乃星ハあせなつち原
咲くは梅子だくゆり乃花
夜ハ屏風たきて井くそ外
妙ありとふは月おろり外
橋ありそ井はく海も本音

中よ廻り花よりも名を知らずか様
立よ、花よあれや音れ海
風よらふふ葉菊、瓶つれ外
長老もあつて之玉池田炭

平次宗温

君のわーた
雲よ海よりそあつて音れ外
玉の井はく流るるあつて
あつてあつてあつてあつて
ねむるはこころをいひるわれす
けりなきれりたたくらぬ
あけてはあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて

あまもん花ぬりたゞれり此は
風の口さらよま紙乃糸操
うんんに柘うんれ操りあ
月の比れくみまらむて泣みはみ
つよんみうむいこゆびの弁月
雲火の就れとわろ鹿痔やき
りもまんよたぐりおを及人
花もゆり開くがんひの達
月代むにさふる氣れお
うん寺におまれ山のをこめ
わまりやうそつげおら
花のたぶるのあをまら

富士川の波れ教もたうひうか

竹田信重の 歌永

常也かふりゆふも舞乃舞
ひのら海きりや常も昔部
かうこゆきとれのはる終路も
あくれ枝舞のうもれ衣舞
けされむらま海をむまの
今日れに舞り初んか

服アおらう 宣春

え日
気喘てハ風新喜乃朝日
髪とん柳ハ川の志りげ
らん松かをれおら
花入の足よあんやわつ

あはれつじ二かれ杖常介
らりそみよ花よらげあき系橋
花らんぬ人や高生いぬ橋
あけきりらげんや拂ふ橋
ありやうも小町おらや物さひ
娘の春月つぎの鬼おにれ身みとら
仙人せんじん乃世界よう菊きくのつら乃月
この葉ははきのほろ雪ゆきなみ
大寺だいじ 教きやう巻まき
耳みみのくそくそ鳴な敷しあへん時とき也
升のぼ侍しやう吉きち忠ちゆう次じ
くふあさけ小こまま下げす縁えん
縁えんのあはれあまりにあまにあまにあま

腰こしけて蜂はちの鳴なきややあはん
足あしたらくきも所ところりもも年とし也

雲うみ乃地ち橋はしはら萩はぎ乃声こゑ
屋や原はら身み入い心こゝろ依よ

東あづま也やと長なが志し乃のむむ朝あさうき
夢ゆめあう又またうう此こゝ橋はしのの色いろやめ
東あづま海うみも鳴なううくくひひももややああいいををあ
富とみ古ふる山やま根ね引ひききたたけけうう心こゝろ系
庭にわあうああくく月つきりりももああららううも
もやもくく咲さけけ小こ雨あめああたたなな花はなん
ああ草くさ小こ史したたかかああららうううう營えいううか
青あお梅うめののむむひひののむむれれすすららううううか

久く入るも入たき歌うか

ねわらるる花の首あしやじ

実盛の懐かきそがふまのけり

ゆりしたまふとわらむ

ねれも鞠ふるやけぬらん

五月のあまの 重芳

木ふらんで鳥も飛ん柳もえ

花乃鳥と目まをばか柳も

福休さうや風も貞徳を分り

咲花も先一ふ梅色あけ

身てふくれか子や牛のむ様

ぬま子もあへ唐紙も蔵か

雲行け海へ入あともや玉佛

雲はあをわたり成せぬ

咲花は是れ捨ていそい

風のもてはるれをれ衣うか

くろくもや霞のきぬの

花のまはりつるや小町様

花ハむとこ一ハ二重う

花の名は天地雨露の

山吹のほかに八枚合

春はせめてふかきも

おへきと勢もなれた

あなまわりのともや

花は名や香あり喜れ

今日の花はよきと

野ふそくまの香根のなぐさ
楊枝のしほくえんくらま柳の
花野戸とぬいさくはくす
鷹おのれんはくし向子
まめおほくもあけ緒の
六尺のうくいぬ人のま
一尺の佐のたぐれじくけ
まの車いあつちあ
をれしてたむい月乃
むくしはくし廣袖の
おあけしはくし
西のまはくし
三月は十紙

夜はのあつ棒もあつれ
糸垣のあつま
炎年しきり袖の
あつち横あつち
きり
夜はのあつま
月乃
子あつち
林のあつち
月乃
花乃

歳年とらん百年乃曉
高人も彼の善法風をとりて
月費付利を酒ふぞあは
かきんれはも九人た教のそ
りての舟れあまのりしる

西村次郎重五

られて又我とらりすゆ柳か
やまにせしりきこめ花は
らりたらりきしりたの海

江平舟を舟まらりし時 陳甫女

雲ハ操去今そ海去人雲佛

歎みれ教きたりふおなほまらりし

く乃こくあらりしお竹田重甫女

黄とあし佛とれちせ女郎花

東海春香の 西村

まづれはちや海ちや梅の花のま

春毎に開地あるを普賢の

山のうや帯細はく花の面

あつしのかとあつちよ小糸花は

お花小あふらみ乃新新外

型合ちとまよふ山勢一云

あけやあけあめや雨あこれ都云

花の細さく石竹やうい帯

一ふくせ竹もはあつちよ外

又月ハ新葉たけりあつち面

形もかもしきうはくも月

月も本に輝くみえくろの露は
老と如くくろの月は人あけ六
花のけよいろもあけ志無花
かゝる紙やいしゆは天の
ありまゝかゝる紙や合流
枝も葉も何しかりあり雲は
あしたまゝぬ古井戸の月
傳りし氣燒の庭へむらさき
あすびよ虫の跡とみたり
くろもあつたさあひの雲の
波中にくみあつた如く
石の切地ある風乃文字消く
長丸丸童湯は却老丸

と郷歌くれは前載の標よ
下わりの花はさりとて
あきぬ多言下は西武
ゆり花はほめりり菊は酒

長丸丸
小蝶の夏も子年乃秋
月帯は帯とと病は帯
あきぬ多言下は西武
ゆり花はほめりり菊は酒

又むらさき乃よ別
佛はぼけりよ道人の程
大東はぼけりよ道人の程

物まう秘蔵志ても消燈を流ん
あふむらるる秘蔵志ても消燈を流ん
あふむらるる秘蔵志ても消燈を流ん

川中草堂 吉次

蜘蛛の糸やけけりすか川柳
猫乃子たけけりすか小蝶や氣流
飛々小蝶や蜘蛛の糸けりん
日の下れ花乃あふりてせ極
くきりりすひてらるる二月
木の芽れ綿乃糸や丸紙下
下上之糸はや解るる室敷酒
よふもさるりてさふれぬらん

あなもあふれむすもれ聲ひらめ
入心の川中かやなせりらん
此所ゆしてやせ世へまじし

奥田能重 清政

養虫の花はききうや梅れ枝
雪消て咲紅梅やまふあけ
引さくじさるや梅の葉さうら
ま程りて極木う春の梅わらし
本よ竹城流るるたふりて教様

吉村六三郎 元夙

梅の雪も月の中れ春の心外
白ひけの輪は毒れりてれりて
池は田よ又雪にまじりてさうら

伴莫説もいさめみ居らん伴珠櫻
飾てもよきひと歌すか櫻鯛
借墨花も海中ゆも櫻鯛
春の風乃きり吹くくぬままき外
春風も吹くれ巻乃くくくく
去れ野の鳥か食すか蜂蝶か
吉野葛も根山ぞ花の風
ゆくゆくそくそくそくそくそく
九重や実一八乃花ありり
松ありそ中もまきこ風かけ
見事やとうえりて川の家
猿猴も梅月とくありやとく
子もあつるに生そくくみこ

らんくは月とてやせん

山嶽の舞鳥は雲に茶のり也

中井次喜末 正直

讀身此おももろくありて
永命よ花の口も大何くも
疵もよと毛枝吹風く大橋
海棠紙眠花よとゆ小蝶式
おまも引本も葉八新茶葉茶鹿山
ゆたぐ水鏡もゆきあまはこ
松花ははりのすまろくお乃ま
橋書よあすもゆれ文月車
山乃京も入文月金もみみ
川柳もや蛙のつりあり

枯風を越ゆ柳の西くみそり
弓張の月もやまよひやまよひ的
雲のよひは月れゆけけ
楊りう蒼乃春の三ヶ月
得しは菊よ八鶴やあふ草
雲れは八百是月れ鞠る山
三ヶ月のたな三路名也
白露はどのうま子う鶴及華
枯風よあつらにまらふるれ作
お菓子海河海路う芽も光の
新はも楊枝くこしゆりゆり
臘月あふるる年れ光るる
ふれたる葉も樹整

家も世に唯をりあつる也

花のよひはうさつゆりさひは
糸素れ流るる胸のまやせは
をるる山都れ道くろく仁

むまはりこにはあはれさ
まじゆきあつる八神のまはれ
うむらひ免山のお舞あかり
碓たの上酒乃かかんせう

たぢち海れ庭はみえぬ家
引と糸は皆はひのひ茶を
今日うかあきいさやう
をそれうり乃考候はれけん
本秘紙は柳もわたりひあせ

みちと紙をそとれし終とて終

娘のそとる自治

笛古山ハハもまゝのそとる終

栢木乃終

凡も字もそとる物もそとれ終

わらふ人おとくいもそとるあり

右のそとる終

かそとるも只そとる終

久保田のそとる終

はきそとる終乃そとるにちん一

川野乃そとる之終

一終終うやたののうらひんか

潮屋のそとる終

あつち終風の一そとる終

文川のそとる終

石竹のそとる終やう一終

栢木のそとる終

分すめ終由れうら終

あやう青酒のそとる終

村山のそとる終

父あやうあつちのそとる終

親孝

是重気志のそとる終

栢木のそとる終

うらみそとる終

腰張のそとる終

重好

おひくとりおたふりきく

わねまの二子成をいりうび

山崎の吉本 重

四十二とわくらん

えあぬ成六七をきそわの草

下村の吉本 正杜

あらむぞかゆ十日來月

たき長火花成ちしん物成

小本成吉本 重信

たぐうのありれ物とて

着る物成はき重れ思わつ

重信

たのぬ人のくふり

名れ子なき成はき成は

高瀬成吉本 正代

ふりりくと成あふ

らんちるれんも成

思村の吉本 義樹

夕たられとれてた

名中成吉本 長政

夕ま成ふり納る

御世成吉本 宗授

尖の上でとけぬ

とく成いりりる

正代

あしはらよきと思ひて入侍り

勅世座意門 皇後

くさくさくへんまへ乃みどれ酒

せよはあつちや宮より白志炭より

卯の嵐のえはに東吉道常教白よ

當年は末篇は乃くは柳は

ケ庵言當

貝ニツそふも乃あへはり

末吉増重息 道節

春立とりのちや香天の志くはき

あはれらみ入ふ箱は和園は

あはれはひら細のうろるあはれ部

年の年うしのえ日
年と日なりしと車はただら外

牧れ子は昔年つようは朝乃春

年やよなはれりてくは露は

あはれやき乃よのそと二はあり

あはれはれらみ入ふ箱は和園は

あはれはひら細のうろるあはれ部

あはれはひら細のうろるあはれ部

春の山乃くはれ雪は志よりは

あはれはれらみ入ふ箱は和園は

あはれはれらみ入ふ箱は和園は

あはれはれらみ入ふ箱は和園は

あはれはれらみ入ふ箱は和園は

あはれはれらみ入ふ箱は和園は

本園寺へ糸橋とよまうりて

能もあつと来りや蓮の事極
花も風ふあは吉野志門う哉
あけつらんおつらんもぞらん作燈檪
大あつと人もあつとあつたつめ
長存あつと朝の風を籠り子看
車あけつらん蛙の奇哉祿云哉
節もあつと牛の筆駕つらん
猫つらんも嵐はなげつらん草
あつとあつとつらん疾風の風
卯花もあつとあつと声時を
あつとあつとあつとあつとあつと
三公あつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと

田の中はあつとあつとあつと
生れ性のもつらんあつとあつと
鬼の目乃瀧うゆりれ花乃露
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
春日山の蟬の音あつとあつと
賢よあつとあつとあつとあつと
綱音あつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと

中井信房 道保

四又

いのかささるけり哉ふれり
きりけりおとろくすか
氏あつて家も車や花れり
こころもあつげの中れり
あふりもあつていふれり

寺田信房 好宣

こやゆき音蒲方やあつり
よあひのいん信あつた
あの子もあつて二あつて
けりけり信あつて一あつて
月あつてあつてあつて

加世井市之忠 信房

和田信房 宗達

年越て後まをさるる
作保あつてあつてあつて
あつてあつてあつて
ふとこころあつてあつて

首奈杖 興義

次実信房 章親

指城あつてあつてあつて
あつてあつてあつて
あつてあつてあつて
あつてあつてあつて

とらりくんととらわつつき
あふ津のまきゆいでるこおろし

小川道下

親もびりく子もそびりく

隣はく隠居も代のあそび

日笑田原屋守成

天原さるあふ涌まされうか

肩より一糸白髪山乃雪

徳本松普志 惟平

雪の入り乃あやまらふれは

今日も松年昨日も松年

月の比旅之人乃天気みく

りもよりありし雪れぬらひ

たけをばれよき小袖きかへ

塩の粉引大斗り松年

松年也新理のか城めららん

長のうらみ紙をふちあふ

桶ゆいんやんぐやれぬん

城の用ふきもことハ利

打まよひら乃甚せいはは

下よあしをすふく風にあ

千田原葉 友勝

あつあつとくと常はまらふ

大地うらまきよゆやわら

正行寺 正長

あつとほけぬきわいし種たね
あつとほけうつをきわいし

中流因花思 貞義

正月やめそたい然つは惠養子棚あひす いま

きつえんはふさううさひうか雪佛ゆきぶつ

考ゆと名橋なはしのこわげうか

草の葉れおほや雪れむらり玉

月氣もやう夕まきはあうらうか

あよあえた人醉すいうらか千鳥足

あうくと栲木くさきにうくれらうか

風のよきうもむ理敷りぢれ玉敷たまぢ

日本にっぽんのや雪れあいたる老ろうの玉

一めんいちめんの池乃いけのありや大々たいた見

種いのほろありや種たねれ竹たけあり

ゆりさううらんか敷うらんまわつよう雪佛

二月にがつのあうさひう雪ゆきわいさう雪ゆき

葉はれ花はなの細こいねをくも風かぜさうら

そのいしあうあうのそつりあり

うまうされまれ有あらう長なが病びょう

かんぞうまうまう種たねれんたけ

あまあうまうの雪ゆきはきわにわい

種たねれ世よまうらうひ乃のあま

玩あそばあまえたりそも馬うま馬うま陽ひ

上かみ葉はにうあう風かぜそあう

あまあうまうあまのたうあまあま

あまあうまうあまあまあま

あまあうまうあまあまあま

夏はけりしわは人の口より
見物もあはれにわよむはあし
多しよふはあしとてはあし
百姓や秋もく然りららふ

善光寺 守業

門前よりあはれのかやあはれ
藤原のあはれや琥珀乃あはれ
朝顔もあはれか 日まべりか

草花もあはれか 日まべりか

山寺もあはれか 日まべりか

大槻之末 為成

とらけたはれはれはれはれ
いも園あはれはれはれはれ

あはれの月もあはれはれはれ

中江藤原 正盛

いも園あはれはれはれはれ

長井中江藤原 正盛

風はけりしわはれはれはれ

まはれはれはれはれはれはれ

かたのたまはれはれはれはれ

雪やけりしわはれはれはれ

あはれはれはれはれはれはれ

改明

あはれはれはれはれはれはれ

花のあはれはれはれはれはれ

志乃んてあはれはれはれはれ

洞ありし月波か人置れは成志也
打まらぬ幕分ちぬぬ紋あれ
先りしかめくち成すれり
物備そこきわくわく飛く
出きし汗飛れそこの中気也
此のそりとあり成志のひだの
月見よまぢやまよるよりの
赤もむと山いそふよをいれを
月やあめとれやじうれあへの
まげしあまよわくゆりあぐ
うかりきぬ人成物成し山の天
今日れきに成物もあ
いし人のあはれは成白よ成解て

兼もああり興もああり
後ゆき成す清の山天を成て
醒備はまぢる乃うう成
成るも成れし成物成りて
は付乃成結成すよとゆり
山成成る人成成り打たれき
小舞しあおもり念佛
尺八の尺がまぢる成打成て

重利

成れ成りの子うかときき
暑き時ふれ成ハ成り
子苗さ成小田の成筋切り
車やハ成り成り成り

海老とらして鮎や賣らん
長八洞てお名の中へ

何れも小月やあなただに
經命の人と志んく志ん

お返ししけり恨借れ利
後語清すも鈴ひ六甲

卯辰のこまよとけな
右彌志まよふるれ

麻呂赤地の錦 命と志んて
類いありと切小瓢

經命の人成志んく志ん
名茶も何人いせき

釣念もまれ丸山柳

豊村又花 氏次

小車は流やんまらふ風
魚よありうてもふ

尾田深月 重利
字のしるけあむら

梅のあよ侍くすひせよ
富毒七五の政屋

実勢二せうに歌か炭
苑の下へ流んきく

浄足寺 柳如

何けて又長八朔日
あつもきをそらり

飛梅や自在天よりり水鏡の
水よりまらぬ世たなむと川極
けけと鳥丸と甲垣根にえらる哉
あらしひ風をゆるめぬとらぬ

之重

芳若とつふ人ね暮あはす死て

よいの年より元日と西の夕哉

春も夜戯りまはせ川玉丸年

三月の時雪れよりくれハ

去れ雪や遠山にほろとれ鼻寒

不佛をうらくゆづかゆづか

あつこうあれ宮方八方

火踏をぬきたりと燈籠張る元

仁義なき事 登能

名残がくれはゆきこととふ

何くして逢ふれんあゆりあらん

わさめくこに十とて候とてりは

一字たしはよしむやましく事

大和田又なり 氏海

管も天ハあくり各ねり

山がみかた 西武

糸が草草来れ葉子れれ物のある

年越のまも玉たりむじし日

何いづらやりわうと志と折春日

管此方や書うり焚きる乃何と

めうとがや草れんんと年男

たれ此仇のあはれきとてるる維新
 友つるもまひいてあそぶるを世に枝
 高り棚へあがりあがりあがり
 何れくもなるともあはれ衣久
 風風り声のききあり部一云
 部云見れどあくハ羽者りか
 人のあそぶるを打たる時を成て
 一声やまのつれ一白部一云
 久かたられいもあけつるこ非
 管火いりぬとらんれあしりか
 作てあそぶるあしり管火をい
 出候もろや管中もあ和の用
 甲のありまろやたんとてはれ武志

八月廿五日苗坂くじこみ
 あり竹の道きや八分七分あり
 あり井はんけや新あつり
 氣しき一寸法師 亥九月
 焼きやわろて下海をあそ
 石竹のつたこといあやむり
 梅子れらりげあわさ日けう系
 花やいまる基成打せにれん
 何家ぞわく衣まうこせこの後
 百しうけらんらと挑成るれ
 花るそそまれ挑りあやむり
 山やありれあそぶるあそび
 ありあそびたあそぶるあそび

流るるも家かす風おも鹿の
 葉はられとぬ風風やれんくま
七月四年
 二あゆや西川路の清又月
 七せきばあけてもとんかき声
 舟船もくらねまよけよの川
 朝くわやうもんも何とらあさ
 おりくやわりの風うてままうり
 麻くくはえく日くくれお糸
 美りあや山のあなまれ人のく
翁
 流るる風くよは白くあぬの
 せんいきうひもあんくこれあは
 名月ハ流るるうらわの中あ
 けんおも芋名月れりう家

山姥やも名月の芋のうら
 りら月れりかえんやうら
名月白あれ
 毎雲いづきれげら月水
 月の差はあて娘うらうら
如きまて
 下こまいた月ハたまん丸や
 思ひ念のらん月ハ日か
まこと
 草道熟ぐ存れおりて那
 唐瓜うけて馬と云あり中茶
味有り
 耳をてくむやいらん菊花
 かおもかよらん花や百夜子
 か下地ハくまそめれ葉の虫

いふ所らて打たるる... 衣ふ
くまやし... 九月の九日

め屋寺の松尾
日蓮の... 九月と十三日

あてられたまふ... 月... の

くもりらぬ... 加... のみ

苑あぬお... され... 外

あみう... 暮... 演

海軍く... 中... 足

都の橋... ありや... あり

い... 全... 門の

[Faint bleed-through text from the reverse side]

みそ... あり... 丸... 見

せ合... あり... あり

あ... あり... あり

あ... あり... あり

あ... あり... あり

あ... あり... あり

あ... あり... あり

あ... あり... あり

あ... あり... あり

あ... あり... あり

あ... あり... あり

あ... あり... あり

あ... あり... あり

縁のあやまり有りかみどり
物事あるれ

鈴すずもやふ物かあいんま鷹たかのつ筑つ波な

さりらん人よそりしりか

太らりも物さぬ身あけりじまは

ぬさりけくるとんぞりあき

よれたのしりりは流けてえあつ

うらに名づくかたふくばうか

寛永十五年五月廿六日 長頸丸

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.



共五

二條寺町

寛永十九初秋 野田屋甚清用板

